時の原始的樣態に就て

務臺理作

一

時の問題と云へば先づ第一に時の種類の觀念を明かにせねばならないが、自分は此處では單に內在的時間と超越的時間とを區別するにとゞめ、此內在的時間に於ける原始的な時の樣態の如何なるものであるかを明かにして見たいと思ふ。

內在的時間とは純粹意識の立場に於て直接なる內的反省 (immanente Reflexion) 又は內部知覺 (innere Wahrnehmung) に由つて直觀されるものに屬し、其立場から離れずに本質を分析出來る樣な時間を意味する。之に反して超越的時間とは、夫れ自身具體的體驗に與へられず寧ろそれを超越して獨立的存在を持つと考へられるものに屬し、それの構成的原理に與かる時間卽ち事物的存在に實在的に關係する時間を意味する。かゝる時間はたとへ批判的認識論の立場から內在的と考へられても、直接なる內的反省又は內部知覺の對象となり得ない限りは超越的時間と呼びたいと思

ふ。一般に生き生きとした現在の體驗に卽し、內觀に由つて分析出來る時間が內在的であり、しか出來ないものを超越的時間であるとすれば、原始的な時の樣態（temporale Modi の吟味はこれを內在的時間の立場に求めねばならないとは明瞭である。過去、現在、未來と云ふ時の樣態は極めて原始的な時に於いて成り立つ。逆に極めて原始的な時の意識は過去、現在、未來と云ふ樣な樣態を離れては考へられぬものである。最も原始的な時の問題は「どれだけ永いか」と云ふ問ひではなくて、それが「いつ」であるのか、今の今か、すぎ去つた今か、やがて來る今かと云ふ樣な樣態的區別にあると云はれよう。

時の樣態を區別する出發點は現在の意識にある。現在ほど吾々に直接なるはない。生き生きと、leibhaftig に、新鮮に現はれ來る體驗が現在である。唯現在あるがために過去と未來を知ることが出來、現在そのものをも知る手がゝりを得る。過去とは今はすでに過ぎ去つたものであり、未來とは今はまだ來ないものである。更に云へば過去とはかつて現在にあつたもの、未來はやがて現在にあるものである。しかし現在は時の意識の出發點ではあるが、時の意識の全體ではない。現在は單に現在であつて過去でも未來でもない。吾々が現在の意識から過去や未來の意識に移る

には、先づ現在をのり超えねばならぬ。卽ち「現在の無」を意識せねばならない。然し現在をのり超えて非現在的なものに達し得ても現在は無になつたのではない。現在をのり超えるものも現在であるからである。過去や未來の樣態に於て或ものを意識しても現在の意識は依然としてそれに結附いてゐる。矢張り意識の現在に於て過去や未來を意識するのである。吾々が現在をのり超えると云ふのは現在から分離したものへ移るのでなく、唯非現在的なものとして、それを現在に意識するのである。か樣な意識の二面――その一面は現在に立ちながら他面はそれをのり超えて非現在的なものに結附く關係は、如何なる意識にも缺くことの出來ない本質的なものを示す。吾々の如何なる意識も現在の核心にふれつゝ他端は非現在的な或ものに結附いてゐる。これを指して私が「或ものを意識する」と云ふ。此の或ものはいつも非現在的なものとして、しかし私に「意識されてゐるもの」として現在に屬してゐる。か樣な非現在的なものゝ意識に卽して過去や未來の意識が成立つと考へねばならぬ。

過去も未來も共に「現在」を離れ得るものでなく「さつき現在にあつたもの」「やがて現在に來るもの」とすれば、このさつきとかやがてとは今を變樣 (modifizieren) したもの

と見られる。それは今の變樣である故に今の意識を基底(Fundament)とし、それに結附いてのみ意識される。更に或る過去(未來)についての同樣な變樣を考へることが出來る、卽ち變樣の變樣をすることが出來、かくして吾々は時の變樣を無限にすることが出來るであらう。すべてこれは自由にいつでも現在に於て現在の變樣をなし、かゝるものとして現在に把捉し得ることに由る。時の意識は原始的には現在の變樣の意味を意識するに外ならないと考へられる。

か樣に「意識は必ず現在に於て現在の變樣を含む」と見、これを本質的なものとする時は、ブレンタノが初めて明かにし、意識の內的考察に缺くべからざる見解と見られる「如何なる意識も對象への關係を含み、此志向的關係の變樣として種々なる精神作用を區別する」と云ふ考と如何に關係するであらう。ブレンタノに由つて如何なる精神作用も對象の表象の表象であるか或はそれを基底とする認容であるか情意であるかであり、しかも此等は內面的に統一されて唯一の意識を構成すると云ふならば、同じく、如何なる精神作用も現在と現在の變樣とをその中に含み、しかも合して唯一の具體的意識を構成すると云はれるではなからうか。若しかく云はれるとすれば意識は作用の性質的區別を含むと共に時の樣態を缺くことなく含むと云ひ得る

であらう。吾々の意識は常に意識するものと意識されるものとの關係であるが、此處に關係の持つ二種の變樣が示される。作用の性質的樣態(表象、判斷、情意)と、時の樣態(過去、現在、未來)と如何に結附いてゐるであらう。

二

二種の變樣の結合關係を考察するに先立つて私は先づ「現在」の意味を明かにして置きたいと思ふ。精神作用の性質的區別の明かにされる場面は現在の外になく、また時の變樣の出發點も現在を離れてはないからである。ブレンタノは內的諦視の立場を內部知覺に求めたが、內部知覺の確證は現在の意識の確證である。「如何なる意識も對象への關係を持つ」とか「表象なしに何ものを判斷することも意慾することも出來ない」と云ふ認識は此確證に由てアップリオリを持つ。內部知覺は外より作用に加はるのでなく、作用すること夫れ自身に由て知らるゝ現在の認識である。如何なる作用にも伴ふと云ふ內部知覺の結合點は現在の外にはあり得ない。恐らく吾々は常に內部知覺と作用との結合點をば現在と意識するのであらう。唯現在の眼の前にのみ作用の性質的特色が現はれて來る。か樣な現在とは如何なるもので

あらうか。

現在ほど直接なものはないが、また現在ほど認識し難いものもない。現在を把捉しようとしてゐる間吾々はまだ現在を知らない。これが現在であると把捉して見れば已に過ぎ去りし現在になる。然し把捉しようと求めてゐるものも、把捉したものを已に現在に非ずと見てゐるものも、現在にあるに違ひない。今の今求めてゐるならば、今の今見てゐるならば現在は確に實在してゐる筈だ。現在とは如何なるものであらうか。これが現在だと定まる時已に現在に非ずとすれば、此現在は今の今實在しても次の瞬間に失はれるに違ひない。さすれば現在は無の瞬間に行かねばならぬ、卽ち現在の無と云ふものがなければならぬ。現在の意味を理解するには却つて「現在の無」を理解すべきではなからうか。意識は現在をのり超えて非現在的なものを對象にすると云へば、如何にしても「現在の無」を意識せねばならぬ。現在の無とは如何なるものであるか。それは現在に達しきつた瞬間に起るに相違ない。然し其無の瞬間に今迄未だ現はれずにゐたものが今の今のものとして新しく生れて來ることも確かである。無がなければ現在はいつまでも現在であつて、過去も未來も失はれると共に、新しくものゝ生ずる次第もない。然し今の今が生じて來るから

にはどうしても現在の無になる瞬間がなければならぬ。現在の無は何處にあるのか。現在の何處も今であつて、今の中に無はない。今の直觀は無そのものゝ直觀ではない。如何にして現在の無と云ふことが考へられるか。

如何なる意識作用も孤立して働らくものはなく、作用すると云へば作用と作用の結合を含まねばならない。見ると云へば色や光や形の表象の結合を見る。如何ほど單純な意識作用も動く限りは無限の作用の結合を含む。若しかゝる結合から離して結合のない作用を考へるとすれば、もはや永遠の意味 (ideales Sosein) を見る外はなからう。働らくことは結合することであり、結合すればその意味は具體的に顯現する。即ち顯現的形相となつて意識に浮び出る。これが內部知覺の直接なる對象となる。然し働らくと云ふことは無限なる働きを示す。何となれば働らきが「終る」と云ふことも意識されねばならないからである。それ故作用が一つの定まつた形相に達することは無限の動きに矛盾を起す。作用はこの定相を突破せねばならない。即ち作用は働らくために結附きを求め、結附けば定まる故にこれを突破して更に次の結附を求める。此處に顯現的形相の無になること、現在の無に陷ることを必然的に豫想せねばならない。

然し如何に考へても現在そのものは無ではない。今の今顯現してゐる。現在の何處も今であつて今の中に無はない。それ故無の瞬間は現在にはない。現在は顯現しつゝあるもので未だ無には達しない。無の瞬間はやがて來る瞬間であつて今の今の瞬間ではない。然しやがて來るもの(未來)が無の瞬間を持つであらうか。無は現在が突破された姿であり、突破するものが未來であつて、突破された現在が無に陷る。突破された現在が過去になるならば、無は却て過去が負ふべきではなからうか。か樣に考へれば無は未來に屬する樣にも、また過去に屬する樣にも見える。此ことは現在が無より出で無にかへる、そして此無に於て過去と未來に接することを示すではなからうか。

未來はまだ現はれぬもの、然し斷えず現はれようとしてゐるもの、現はれようとしてゐるものが愈々現はれるにはどうしても現在が無にならねばならぬ。さすれば現はれて來るものはまさしく無より生れて來た。然し生れつゝあるものより見れば無は通りすぎて來たものでなく却つて其行く先にある。無は顯現の完成にある。已に生れつゝあるものは無が何處にあるかを自己の記憶に見ることは出來ない。無より出る途を記憶は知らない。記憶は過去を敎へるが、過去とは有から無へ落ち

たもので無から有を出すものでない。過去は無を作るものでなく、無に陷つたものである。吾々は未來が現在へ働かうとする意味を過去にふりかへつて記憶の中に見ることは出來ない。それで現在は突破された過去から生じたのでなく突破する未來から生じたものである。現在は確かに未來より生ずる、然し此ことからどうして現在が無より生ずると云ひ得るであらう。現在が未來より來るためには已に現在にあるものが無にならねばならぬことは明かであるが然しそれ故現在は無より生ずると云はれるだらうか。現在の陷る無と、現在が生じ來る無とは別異のものではなからうか。そも〳〵現在が次の瞬間に達せんとする無とは果して如何なるものであらうか。單に現在がその立場を失つて過去に陷ると云ふ意味だけの無であらうか。例へば赤が青になると云ふ時、青になる瞬間に赤が無になると云ふ意味と同一であらうか。唯ネガチフなそれだけの意味ならばその無より現在の生じ來る筈がない。かゝる無は現在の「陷つた」無であつて現在を出す無ではあるまい。然し有であるものが「無になる」ことは唯働くものだけが爲し得ることである。一旦有と定まれば有であるべきに拘らず「無になる」ことは唯不斷の活動のみが爲し得る。今を無になし得るものは今をのり超え得るもの、卽ち意識の働きのみがよく爲し得る、

今を超えるのは働いてゐるものが働かうとすることを求めることを示す。働かうと求めてゐるものは、唯求めてゐることの他に何ものもない。求めてゐるものゝ中には未だ働かれた何ものもない、卽ちそれは無であると考へられる。現在が完成したそして働かれたものになつたと云ふ瞬間は丁度この求めるものゝ現はれる時である。それがまだ現在の達しようとする無の意味である。それで働かれたものとして過去へ陷る無と、働かうとしてゐる他に何ものもない無とが唯一の無の中に含まれてゐる。後者の意味の無は未來と同じものである。この未來から現在の生じ來ることは已に明かにされたと思ふ。かくて現在は無より出でゝ無にかへる、又は未來より生じて未來へかへると云ひ得るであらう。

然し現在が未來へ還ると云へば同時に現在は過去に移ると云はねばならぬ。過去とは如何なるものであらうか。過去は働かれたもの已に見られたものである。何がそれを爲したか。現在の働きである。現在の働きが自らをのり超えて未來へ還る時更に働かうとするものと已に働かれたものとが別たれる。働かうとする力の張りつめたものと、それを失ひきつたものゝ順序をひるがへすことが出來ない。それ故現在は一方には未來から生れて未來へゆくと共に、他方には過去の深淵へ落

ちてやまない。未來へ歸るのと過去へ陷るのとは、唯働くものと働かされるものゝ違ひであつて、意識から見れば唯一の働きの行く先に外ならない。如何なる意識も唯一の働きに於て二つの方向を持つ――一は現在から未來へ、他は現在から過去へ前者は不斷の圓周を描き後者は無限の直線をなすとも考へられよう。

すべてこれは現在が無の瞬間を持ち得ることに由つてのみ理解される。更に云へば現在を離れて何ものがあるのでもない。未來とは働かうとする現在であり、現在とは働きつゝある現在であり、過去とは働らかれた現在である。現在の無とは作用の結合から結合への「移りゆき」である。眞の現在の核心は却て此無の瞬間にあるのかも知れない。眞に現在の働きの中に入つて見る時、すべてが動く故に却て動かぬものがある。其處に形相が顯現して現在が定まる。それが現在の無でなくて何であらう。生ける未來は現在の彼岸にあるものでなく却て作用のたゞ中にある。未來とは今の彈條の如きもの、過去とは落ちた今の影であらう。

かゝる現在の無に於て限りなく現在が變樣される。吾々は此無の瞬間に於てのみ過去にも未來にも出入出來る。無を持ち得るほどのものなればこそ此自由を爲し得る筈である。然し此自由の裏には働くものと働かれたものゝ間にひるがへす

ことの出來ない順序がある。時は此順序に於て未來より現在を經て過去へ流れると考へられる。吾々の意識の働きも一面は此時の流れに從はねばならぬ。

無を作るものゝみが無より生れる。無に陷るものは働かれたものとして過去に陷る。これが意識の面目であると共に時の樣態は此處より生じ來る。卽ち意識が働くと云へば時の變樣を自ら含むことになる。これより內面的な時と云ふものはない。時の中に意識があるのでなく、意識の働きが時を含む。意識が働くと云へば時の變樣を自ら作ることであり、此作爲の前に時はなかつたと考へられる。かく考へて來れば上に擧げた問題――意識の志向關係と時の變樣との結合は意識の本性に於て必然的であるとの確證を得る。然し志向關係に於ては常に對象的なものと作用的なものとが對立する。時の樣態は此二要素に如何なる關係を持つか。對象的なものが時の樣態を持つのであるか、如何なる對象も志向される限り非現在的なものを含むが、それ故に時の變樣をそれが持たねばならぬのであるか。時の樣態は非現在的な或ものに屬するか、それとも唯作用のみが性質的變樣を持つと同時に時の樣態を含んで對象に關係するのであるか。上述した現在の無はこれに對して如何なる關係を持つのであらうか。

時の樣態は對象的(又は內容的なものに存するのでなく作用の持つ樣態であると考へるものにブレンタノとマルチーがある。ブレンタノは表象の樣態であると云ひ、マルチーは判斷の樣態に外ならないと云ふ。次に此二人の考を吟味して見よう。

三

ブレンタノは「經驗的立場に由れる心理學」の中で精神現象の根本的特色として第一には其中に志向的對象を含むこと卽ち對象への志向關係を含むこと、第二には常に內部的知覺の對象となること卽ち內部知覺を伴はぬ樣な如何なる精神現象もあり得ないこと第三には單に志向的に在るのみならず實在的に在ること、第四には全體的統一を持つて唯一の意識を形作ることの四點を擧げた。云ふまでもなく重要な思想は此第一と第二に存すると思ふ。ブレンタノの「志向的」の考へはスコラスチークより來たものであると云ふがスコラスチークでは intentio とは常に species と云ふ言葉と同じ樣に用ひられた。實在的對象でなく、吾々の意識に於ける對象の姿の意味、leibhaftig なものでなく bildhaftig なものを意味した。しかし intentio と species とは全然同意ではなく species と云へば對象より來た姿の義であり、之に反して intentio

とは對象へ向いてゆく、卽ち對象を指示する姿の義をもつ。瞳にうつるものゝ姿でなく「心に」うつるもの「心に」考へられるものを意味したと云ふ（Cl. Baeumker, Witelo, S. 477-478）ブレンタノは此特性を意識の一般的特性とした。如何なる意識も對象の意識であると見た。而して對象を意識することが意識にとつてはまた一の對象となる。意識が意識されねばならぬ。それで意識は二つの對象と二つの意識の仕方を含む「志向的」とは第一の「對象」に對する意識全體の特色であり「內部知覺」とは對象の「意識」に伴ふ意識の特色である。此第一と第二の對象志向的對象と作用）の根本的相違をブレンタノは明かにした。ブレンタノは對象自體としては實在的なもの（das Reale）だけしか考へない。ボルツアノの命題自體やマイノングのオブエクチフの如きものは單なる想念で對象とは見ない。然しそれが意識されて意識の對象（第一）となると云へば全然別の意味を持つ。スコラ學者の考へた樣に esse reale の意味を「離れ」て esse intentionale の意味を持つ。それは如何なる仕方で自體に存在するかに關せず、單に意識されてゐると云ふことで對象たるに十分の意味を持つのであつて、それ自身は實在してゐないものも、更に到底實在出來ないものでも志向的對象となるには差支へない。かくの如く第一の對象の實在性は全く問題にされないに對し、

第二の對象、卽ち對象の表象そのものは志向的たるばかりでなく實在的に存在してゐる。此處に二者の根本的相違がある。此考を更に明かにしたのは「精神現象の分類に就て」の附錄(一九一一年)であつて、其處で彼は心的關係と比較關係との區別を示した。心的關係は後者の如く對等的なものゝ間のRelationでなくて、志向的にのみあるものと、それを志向して實在するものゝ間のBeziehungであつて、ひるがへして見られない對象への方向を含む(ブレンタノはこれをdas Relativliche などゝも云ふ)。志向する者は實在するが、志向されるものは單に此關係のTerminusにすぎない。卽ち對象はそれ自身のSeinssätzungから解かれて唯志向的にのみ存在すると云ふ。此考は次に說く時の樣態の問題に深い關係を持つのである。

意識は常に一次と二次の意識を含む。一次は對象の表象、二次は表象の內部表象及びそれを基底とする認容、情意の作用である。それで表象には二つの仕方が區別出來る。ブレンタノはこれに間接態(modus obliquus 直接態(modus rectus)の名を附した。然し表象に就いては更に本質的なものとして、上の樣態に關係して「時の樣態」が考へられる。時の樣態は志向的對象に屬せずに全く作用の性質に結附いて居る。何故と云へば對象は單なるTerminusに過ぎない。それが自體として如何なる存在の仕

方を持つか、從つて如何なる時の關係を持つかは此處で問題とされない。意識されると云ふ意味では黃金の山も天馬も永遠の眞理も自然の對象も同樣である。自體としてそれが時間に關係してゐるかゐないかは此處で問ふ必要はないとされる。ブレンタノが志向的對象の表象は個別的と云ふ限定を持たない、それは却つて一般的なものとして表象されると云ふのも、それが實在的關係から解かれて見られるからである。それ故內在的な時の樣態と、對象を個別化する樣な、或は對象に實在的關係を與へる樣な超越的時間の樣態とを混同してはならない。內在的な時の樣態は唯意識の仕方のみに表はれねばならぬ。時の樣態(現在、過去、未來)の表象に對する關係は丁度肯定と否定が判斷に對し、愛と憎が情意に對すると同じ程度に本質的であつて、如何なる表象も時の樣態を持たずに何ものを表象することが出來ないと云ふ。(クラウスに由ればブレンタノは始めから此考を有したのでなく九十年代にはマルチーと同樣に判斷の樣態として見ようとしたが[附錄]に於て明瞭に此考になつたと云ふ Oskar Kraus, F. Brentano, § 18)。

そこで此二種の表象の樣態を結合して見れば、現在とは直接態を有する表象の仕方が持つもの、之に反して過去や未來は間接態に屬してゐる。然し現在は過去未來

から離れてゐるものでなく、直接態と間接態が唯一の表象に含まれる樣に內面的に結合してゐる。對象のない表象が考へられぬと同樣に過去又は未來と關係しない現在の表象はあり得ない。如何なる表象も今を以て始まり、今を以て終り、今を以て繼續すると考へられる。それ故時の意識は一つの連續を形作る。現在はかゝる連續の限點である。その背後に過去の連續を持たない樣な現在はあり得ない(F. Brentano, Zur Lehre von Raum und Zeit aus dem Nachlasse, Kantstudien, XXV, Heft I, S. 6-7)。

以上ブレンタノの考を辿ることに由つて次の二點を明かにすることが出來よう。

(一)何故に時の樣態は表象に屬しなければならないか。これに答へて表象は特に一次の意識をなすものであるからと云はれよう。若し對象としての或ものを持たない表象があるならばそれは現在のみに留まつて現在を超えることのないものとなる。おそらくそれに於ては現在と云ふ意味すらも失ふのであらう。それ故時そのものゝ區別の根據は一つの意識に二つの表象の仕方(間接態と直接態)が欠くべからざるモメントとして含まれると云ふことにある。そして時の區別の成立の根據に志向的對象が(それ自身は時の限定から離れてゐるに拘はらず)十分の意味を以て與かつてゐることを認めなければならない。對象の意識がなければ時の意識は生

じない。而して對象を直接志向するものは表象である以上時の樣態は表象に屬しなければならない。ブレンタノは勿論判斷にも情意にも時の樣態の與かることを認めるが、しかし第一(primär)には表象に屬しなければならぬと云ふのである。

(二)何故にすべての表象は時の樣態を持ち得るのであるが、逆に時の樣態を持たぬ表象はあり得ないのであるか。ブレンタノに從へば表象の持つ時の樣態は判斷に肯定否定のある如く表象にとつて本質的であつて、對象のない表象のない如く欠き得ない表象の樣態と見られる。然し如何にして此ことが云はれるか。ブレンタノに由れば意識の現在に於て直接に表象されるものだけが內部知覺に確證をもつて認識される。間接的に表象されるものは、そのまゝでは內部知覺の對象になり得ない。しかしそれが現在の變樣として、第二の現在として見られる時に純粹に內在的となり內部知覺に認識される、卽ち無變樣的な現在から區別された變樣的現在として認識される。この變樣は云ふ迄もなく內部知覺の內省が表象に加へた結果である。如何なる間接的表象も此變樣を爲さねば內部知覺に結付けず、しかも他方から考へて內部知覺を含まない表象はあり得ないとすれば、如何なる表象も、のみならずそれを基底とする如何なる意識作用も時の樣態を持つと考へられる。

四

ブレンタノが以上の樣に時の樣態を表象に置くに反對し判斷の持つ性質的樣態に外ならぬと主張するのがマルチーである。マルチーに由れば、單なる表象だけでは時の樣相的區別をなし樣がない。單なる表象はものを過去にあり、又は未來にありと定むることが出來ない。それは唯思惟のみがなし得る。そのことは一般に判斷の言表に於けるコプラに動詞が用ひられ、その動詞の示す時の區別が事實の時間性を表はすのを見れば明かである。事實は表象の示し得るものでなく唯だ判斷のみが定め得る。それで時の樣態は判斷と考へられるが、判斷が時の意識と如何に結合して居るか。マルチーは時の意識を別つて直觀的なものと非直觀的なものとする。原始的な時の意識は云ふ迄もなく直觀的なものにあるが、直觀的なものに次の二つの要素を欠くことはない。

第一要素。判斷の持つ性質的樣態。この樣態は判斷の本質的區別として、その中に時の樣態を含む。卽ち三種に區別される。(1)純粹事實性又は現在性の樣態は常に現在の事實の肯定を持つ。(2)非事實性の樣態は否定を持つ。(3)變樣的事實性又

は非現在性の樣態は過去又は未來の時に於ける變樣的肯定を持つ。判斷は表象を基底とするが、如何なる判斷も此表象を通して表象の質料と結合し、この質料の中にある一つのモメントを要求する。それが第二の要素である。

第二要素。絕對的時間的位置の連續。これは表象の質料として表象に含まれるが、然し表象の樣態ではない。却つて對象の客觀的質料的區別を示すと考へられるもの。此連續の上に始めて「先立つもの」と「後に來るもの」の關係がなり立つ。此二者の關係は對象に屬するもので、表象又は判斷の樣態と見てはならない。

此二要素の結合は交叉的である。例へば過去にある甲の時と乙の時とは必ず「先立つもの」と「後に來るもの」の關係を客觀的に持つが、然し甲も乙も同じ樣にかつては未來的にあり、かつては現在的にあり、そして今は過去にあると見られる。

ブレンタノとマルチーの相違は時の樣態を持つ作用の種類の不一致のみでなく、マルチーの第二要素と呼ぶものをブレンタノが內在的に認容しない點にある。「時の樣態の連續的系列の外に對象の實在的區別の連續的繼起を許さんとするものがあるが、それは全く超越的なものとして如何なる吾々の直觀にも與へられない」とブレンタノは云ふ(Klassifikation, Anhang, III.)。然しマルチーは次の論旨に由つて時の意

識に此第二要素を欠くことが出來ない點を明かにしようとしてゐる。

(1)、第二要素を許さずして、時の連續が如何にして考へられるか。ブレンタノは時は流れると云ひ、また過去は連續をなし、現在は其限點であると云ふが、判斷作用の持つ時の樣態は純粹に性質的であり、從つて一から他へ程度的に移ることが出來ない。また過去がどの程度に或る時點を距つて居るかを判斷の樣態で示すことは出來ない。樣態的區別は不連續であつて連續的ではない。若し吾々が時の連續を認識したと云ふならばその時は第二要素に由るのでなければならぬ。吾々は勿論現在に意識したものは「次第に」過去へ移りゆくと考へるが、そしてそれを直觀し得るが、その時は已に第二要素に屬する「先立つもの」と「後に來るもの」の關係を見てゐるのである。

(2)、ブレンタノは第二要素は全く超越的のものと云ふが、それは誤りである。第二要素は明かに直觀出來る。吾々は非樣態的な質料的な時の區別「先立つもの」と「後に來るもの」の關係の直觀を持つ。吾々はものゝ運動を直觀するが、運動とは「繼續的に相違する時間點の連續」に外ならない。それ故に第二要素を認めることは決して原始的時の立場を超越するのではない。

以上の如く直觀的な時の意識に第一要素と第二要素が欠くべからざる要素とし

て含まれて居ることを承認せねばならないが、更に吾々の直觀の達することの出來ない過去(又は未來)の認識の場合には、第二要素を反省して作り出した時間表象の助を借りねばならない。卽ちそれに由つて現在性の立場を過去(又は未來)につき出して認識する。かつて現在にありしもの(又は今は未來にあるもの)として認識する。かく現在性と非現在性を結合するものが反省的時間表象である。過去や未來はそのまゝで思惟しようがない、これを現在に結付けてはじめて判斷し得るとの理由で上述の如くかゝる判斷に變樣的現在性の樣態を與へると云ふのである。(以上 Anton Marty, Raum und Zeit に由る)。

ブレンタノとマルチーの間には以上の如き見解の相異があるが、然し根本の問題は時の樣態が表象にあるか、判斷にあるかと云ふことよりも今少し深く考ふべきではなからうか。ブレンタノの如く對象を內在化することに由つて對象が關係する超越的な時を離れる見解に從へば、對象は單に一般的な Terminus として無時間的となり表象作用のみが內在的時間の樣態を持つことにならねばならぬ。然し何故に意識作用の基底として特に表象が置かれるであらうか。表象を作用の基底に置く

ことゝ、表象の仕方に特に時の樣態が現はれると云ふ考へとはブレンタノでは離れられぬ關係がある。表象が作用の基底にあることゝ、それに直接間接の二態が含まれることゝ關係し、この二態と時の樣態とまた密接に關係するからである。表象が何故作用の基底となり得るかは、それが常に對象の意識として直接對象へのインテンチオを含むこと、逆に對象へのインテンチオを含まぬ樣な表象のあり得ないことに基づく。對象の表象のみが時の樣態を持ち、表象される對象そのものは時を持たないと云ふのがどうしてもブレンタノの根本思想である。然したとへ對象は志向されたものとして時の規定から「離れた」としても、それに由つてイデアルな一つの領域を構成するとしても、それへ關係する表象のみが特に(primär)時間性を持つと云ふためには、內在的な時と對象との間に何か特別の關係がなければならぬ筈だ。一般に作用が働くと云へば現存の樣態に於て働くことは明かであるが、過去や未來の樣態がそれと區別されるためには、働くものに對し「働かれた」ものが意識の中には入つて來なければならない。働かれたものとは何であるか、それは働くものに對する對象的なものに屬するであらう。しかも此對象的なるものは、働かれて成立つものとして他面より見れば超越的對象が其立場から「離れ」て意識に內在して來ることと結付

けぬ考ではない。作用の意識に過去はなく唯對象の意識のみに過去が含まれる。ブレンタノが「記憶に由る內部觀察」と「內部知覺」を區別せんとするのも此故である。對象の意識なければ時の動きと云ふことも失はれるであらう。然し對象そのものが過ぎゆくと考へられるだらうか。對象は「意識されて」ゐる限り存在性を中和され唯意味の同一性を維持してゐるに過ぎない、對象自身が內在的の時を持つとは如何にしても考へられぬであらう。さすれば此處に働かれたものとして對象的なものに屬しつゝしかも對象自身と區別される何ものかなければならない。對象自身は超越的對象から超越の排去によつて內在的には入つて來たと考へられるに對し、これはむしろ作用に働かれたものとして體驗の側から出て來たものと見られる。それは對象的なものではあるが、過ぎゆく時の動きに結付いてゐる。從つて時を持たない對象そのものとは區別されねばならない。これがマルチーの考へる第二要素としての直觀的な表象質料に外ならぬと思ふ。

ブレンタノは表象(Vorstellung)を常に作用の側(Vorstellen)のみから見て其質料的方面を見逃してゐることは種々の點から示されると思ふが、そしてそこに心理學者としての彼の特色が偲ばれるが、時の問題についても全く同樣である。たしかに彼は

其深い獨創力に由つて時の現象學的考察を始めた人である。しかし其分析はもつぱら作用にのみ向けられて質料を顧みなかつた。時の樣態の區別されて來る根據、時の動きの成立つ根據には質料的なものが與からねばならない。ブレンタノが時の樣態を持つと考へた表象は單なる Vorstellen でなくして質料をも含む Vorstellung と見るべきであらう。

それではマルチーの見解は如何、彼が時の樣態を判斷の性質と見たるに拘わらず、それを獨立的なものと見ずに第二要素に結付けたのは、ブレンタノよりも具體的な立場に接近したものと云はれよう。また時の樣態を動詞の時の變化と結付けて考へるのは言語哲學への深き興味を喚び起す。動詞が如何にして生じ來つたか、志向的體驗と如何なる關係あるかは時の問題にも關係深いと思はれる。然しマルチーの考へる如く判斷の本質と時の樣態と全然同じものであらうか。自分はむしろ時の樣態の區別の現はれて來る關係と判斷の性質の成り立つ關係とは其方向を全く別にしてゐるのではないかと思ふ。如何にしてこのことが云はれるかを次に考察して見よう。

五

第一に、判斷の性質的區別と時の樣態とは全く別の意味を持つ。

判斷の性質は肯定と否定に別たれるが、肯定否定同樣に時の變樣を持つことが出來る。判斷が時の樣態を持つのは判斷の本質的特色を示すものでなく、判斷の本質は何處までも肯定否定の對立を持つ點にあると思ふ。それ故肯定否定そのものは純粹に性質的で、マルチー自身の認める樣に一方から他方へ度を以て移ることは出來ない。然るに時の變樣は「移りゆき」を持つことを却つて特色とする。「移りゆく」と云ふことをはなれて時そのものを考へることが出來るであらうか。過去はそれ自身に於て現在の「移りゆき」の意味を含む。此點を見ても判斷の本質に時の關係を見ることは正當でないと思ふ。次に肯定は如何にして成り立つか。思ふに判斷の最も原始的なものは內部知覺の認識にあるであらうが、內部知覺は常に肯定存在判斷のみを持つ(マイノング)。意識の現實に存在してゐないものを知覺してみる途はないからである。(然し內部知覺が對象の存在判斷のみに留まつて、性質判斷(S sein に關する)を持たないと云ふマイノングの考には贊成出來ない樣に思ふ、知覺判斷は對象の存在を認容すると同時に、對象の示す性質がかゝるものとして其處に顯現して居ることの認識卽ち顯現的性質を認識することは決して不可能ではないと思ふ。

このことは哲學研究大正十三年九月號に少しく述べて置いた。」最も原始的な肯定判斷はか樣な意味を有する知覺判斷であるが、これから如何にして否定判斷が導き出されるであらうか。否定判斷が成立つためには知覺判斷の立場が一度アンナーメの立場に移される必要がある。マイノングの云ふ樣に如何なる否定判斷も一度はその對象をアンナーメの立場で肯定的に把捉して見なければならない。勿論知覺判斷がアンナーメの立場に移されると云つても內部知覺の働きそのものを「離れて」見る途はない。如何なる作用にも伴ふと考へられる內部知覺を離れることは不可能であつて、此處に實は內部知覺に否定のないと云ふ理由がある。「離れて」見ることの出來るものは內部知覺によつて知覺された內容である。(意識の根柢には常に內部知覺とアンナーメとを伴ひ、アンナーメは常に內部知覺の內容となるものに向けられてゐる) 如何なる場合にも働いて居て定まらないものを離れて見る途はない。內部知覺そのものでなく、內部知覺の內容がアンナーメの立場に移るときに、その存在性は現在から離れて自由になる。卽ち存在判斷から自由になる。其時一方に否定判斷が成立つと共に、他方には否定判斷に對立してideal なものをも對象に持ち得る肯定判斷が成立つ樣になる。それ故論理的に考へれば、肯定否定の對立は、アン

ナーメを必然的に前提する否定判斷の成立に根柢すると見ることが出來るであらう。判斷は否定判斷に於てはじめて其面目を明かにし得ると云ふことは、否定判斷に於てはじめて現在の「時」から自由になることが出來るからだと考へられる。卽ちアンナーメの立場は時の規定からはなれることであり、それを前提して判斷の對立は成立つ。從つて判斷がその本質として肯定否定の對立を持つためには一度時の立場をはなれる必要がある。此點から見ても判斷の本質と時の樣態を同視することは正當とは云はれない。

第二に、判斷の方向と時の樣態の方向と如何に相異するか。

判斷の特色としては、(1)表象の如く直接一次の對象に結合することが出來ない、(2)肯定否定の對立を持つ、(3)その決定に確證を伴ふこと等の點が擧げられるが、かゝる特色は「志向的對象への關係の仕方」にあることは勿論であつて、此關係又は方向の仕方と、時の樣態との間に意味の上の相異あることは上に示した。判斷の性質は對立的であつてそれ自身としては一方から他方へ移りゆくことは出來ないが、若し時の樣態と結付く時は肯定から否定へ、有の認容から無の認容へ移ることが出來る(Aは今在るが前にはなかつた)。またその逆も出來る。卽ち時の樣態はその本質として「移

りゆき」の特色を含む、從つてその方向とは「移りゆき」の方向である。自分は二に於て此移りゆきの方向に現在から未來へ向ふものと、現在から過去へ落ちるものとの二種あることを考へた。時の樣態の移りゆきを入れて、始めて判斷の性質の移りゆき(のみならず情意についても、或は表象についても)が可能になると共に、逆に如何なる性質の移りゆきをも含まない樣な單なる時そのものゝ移りゆきと云ふものは考へることは出來ない。然し今、時の移りゆきの意味をはなれて判斷の性質の移りゆきを考へる時、單なる性質そのものゝ移りゆきは如何にしても考へられぬ故、吾々は移りゆきの基體(substratum)となるものが二つの反對した性質を結付けねばならないと考へる。卽ち作用の質料が移りゆきの路づけとして不可欠的なものとなる。それで時の樣態は判斷作用の本質をなすものでなく、判斷の質料に結付いて判斷作用の中には入り來るものと考へる。判斷の性質の移りゆきは夫自身としては不可能であるが、質料と結付くことに由つて時間的に可能となる。質料が作用と結合する際に質料が時の移りゆきを作用に與へるのである。

この時の樣態のうつりゆく方向と作用が對象へ關係する方向とはどうしても同一ではない。前者は寧ろ對象の側から作用の中へ實在的にはいつて來る方向であ

る。對象から作用に迫つて來る方向である。此見方は、たとへ質料的なものが體驗の側から作用に由つて働かれたもの、見られたものとして出ると考へても同樣であつて、見られたものとして定まれば、定まつたものとして作用を拘束する。見られたものを更に見ようとすれば過去と云ふ拘束に從はねばならない。以上の考察は極めて不十分ではあるが、志向の方向と時の樣態との同一でないことを示し得る緒として一先づ承認して置きたいと思ふ。（未完）